



TITLE:

恐慌下江浙蠶糸業の再編

AUTHOR(S):

奥村, 哲

CITATION:

奥村, 哲. 恐慌下江浙蠶糸業の再編. 東洋史研究 1978, 37(2): 242-278

ISSUE DATE:

1978-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153692>

RIGHT:

恐慌下江浙蠶糸業の再編

奥村哲

はじめに

一 恐慌の襲來

二 國民政府の蠶糸改良

(1) 江蘇——薛家蠶糸「獨占」の形成

ア 蠶種統制

イ 養蠶法の改良・合作社の組織

ウ 繭行統制・繭價統制

エ 糸廠の再編・機械改良

オ 生糸輸出

はじめに

小 結

(2) 浙江——連合糸廠計劃

ア 蠶種統制

イ 養蠶法の改良・合作社の組織

ウ 繭行統制・繭價統制・繭統制

エ 糸廠の再編・機械改良・生糸輸出

小 結

三 製糸業の回復傾向

おわりに

筆者は先に抗日戦争前中國工業の研究を検討し、「半植民地・半封建」範疇の固定的理解が研究の前進を妨げていることを指摘した。¹⁰⁾ 本稿は一九三〇年代の長江下流域の蠶糸業をとりあげ、これまで殆んど研究されていない國民政府の經濟建設と関連させて論じることにより、右の状況を批判せんとするものである。蠶糸業をとりあげたのは、工業發展の遅れた中國において、製糸業は紡績・製粉と並ぶ重要工業であり、生糸は長い間輸出の第一位を占め、重要な外貨獲得商品で

あったという理由からである。しかし同時に、日本資本主義の發展において蠶糸業の占める位置が極めて大きいが故に、中國製糸業の發展は世界市場を通して日本資本主義に影響を及ぼすことからすれば、自ら別の意味もでてくるであらう。

周知のように世界恐慌は日本經濟に大きな打撃を與え、恐慌からの脱出路はフリンジズムと國家獨占資本主義への道となつた。一方帝國主義各國の矛盾の轉嫁を受けた中國では、恐慌は經濟の各部門によつて波及する時期がズレるが、それを一つの契機として、南京國民政府の下で經濟建設が行なわれる。これに對して猛烈な攻撃を加えたのが他ならぬ日本であつたが、その經濟面での理由の一つは、經濟建設の一環を構成する蠶糸統制・棉花統制に對して、日本が大きな利害を持つていたことにも求められよう。南京國民政府は自身の基盤を固めんとすれば、好むと好まざるとにかかわらず、日本との矛盾を深めざるをえない狀況にあつたのである。⁽⁸⁾ 蠶糸業の研究はごく限られた視角ではあるが、この點をある程度明らかにしうらと思われる。

江浙という地域的限定をした理由は、國民政府は名目的には中央政府であつたが、恐慌襲來の段階で直接に權力を及ぼしうら地域は限られており、江浙と並ぶ重要蠶糸業地域である廣東は陳濟棠の支配の下にあつたことによる。即ちこの兩勢力により行なわれる蠶糸統制の成否は、恐慌と日本の侵略を契機として進む中央集權の方向を暗示するものであり、二地域は嚴密に區別されねばならないと思うからである。⁽⁹⁾ 以下、具體的に検討してゆこう。

一 恐慌の襲來

一九二九年一〇月、ニューヨーク・ウォール街の株價大暴落に端を發する世界恐慌は直ちに歐米を主要な輸出先とする中國製糸業に波及し、糸價は一齊に暴落した。⁽⁴⁾ しかし初期には中國が銀本位制であり、恐慌による銀價の暴落によつて對外爲替レートも低落したため、大きな打撃を受けたものの、同期の日本ほど激烈ではなかつた。本格的な打撃はむしろそれからである。中國以上の打撃を受けた日本では製糸工場の多くが倒産し、養蠶農家が破産して地主制を動搖させていっ

た。これに棉業恐慌が続いて經濟は大混亂に陥り、脆弱な基盤の上に築かれた日本資本主義は國家獨占資本主義への道を進みながら、その活路を對中國軍事侵略に求めることとなる。⁽⁵⁾ 三年の滿洲事變、翌三年の上海事變がそれである。後者では上海の多くの製糸工場（以下糸廠）が破壊され、破壊を免れたものも操業停止に追い込まれた。⁽⁶⁾ そしてそれまで重工業建設の重要な前提をなした生糸輸出に對しては、政府の全面的バックアップと國際市場での優越的地位を背景に、なりふりかまわぬダンピングを行ない、中國糸の驅逐をはかつていったのである。⁽⁷⁾

他方、三年のイギリス・日本から三年のアメリカに至る各國の金本位離脱は、銀の反騰を招き、爲替レートの上昇となつて中國生糸輸出を不利ならしめた。そして事態を更に悪化させたのがアメリカの銀政策である。⁽⁸⁾ 三年の銀買上法・銀國有化令は大量の銀を中國から流出せしめ、銀價暴騰とそれによる中國金融恐慌を引き起こしたのである。

この狀況の中で中國製糸業は衰微していった。アメリカ市場では日本糸に九〇%と文字通りの獨占的地位を許し、多年の得意先であつたフランス市場でも日本糸に壓迫され、三四年遂にその地位を逆轉されてしまうのである（第一表の輸出量の低下を参照）。その結果多くの糸廠が停業に追い込まれた。

三年の無錫。「江蘇省の機械製糸業は、全盛時代には無錫一縣だけで五三工場もあつた。……最近二年來、販路がこれまでになく停滯したため、今春になつて各廠は次々と營業を停止し、春繭市場に當りやりくりして營業を續けているのは、僅かに永泰・華新・乾姓の三糸廠のみである」⁽⁹⁾。

三四年の上海。「上海の糸廠及び玉繭糸廠は一一三工場あるが、本年やりくりして營業しているのは僅か六五工場に過ぎない。……九月から一月にかけて相繼いで停業したものは既に五〇餘工場に達し、……なんと最近では必死でもちこたえていた一一工場もまた停業を宣告してしまい、結局全市の製糸業は僅かに福倫玉繭糸廠と永享糸廠の二工場が風雨の中で耐えているだけである。閩北の吳翦なる工場主は……糸車を全部打ち壊し、住宅に建てかえた」⁽¹⁰⁾。

折工の易合は更に悲慘である。恐慌に加えて絹織物部分に人絹が大量に進出し、本來はその原料製造のために建設され

第一表 港別白蠶糸輸出量

年度	A. 總計 (擔)	指數	B. 上海 (擔)	指數	B/A×100	C. 廣州 (擔)	指數	C/A×100	その他 (擔)
1916	64,820	100	28,088	100	43.3	36,454	100	56.2	278
17	68,970	106	29,616	105	42.9	38,951	107	56.5	681
18	61,176	94	27,361	97	44.7	33,457	92	54.7	358
19	82,826	128	37,452	133	45.2	44,992	123	54.3	382
1920	54,094	83	21,590	77	39.9	32,164	88	59.5	340
21	78,531	121	29,312	104	37.3	48,794	134	62.1	425
22	83,851	129	30,366	108	36.2	52,969	145	63.2	516
23	69,329	107	25,380	90	36.6	43,153	118	62.2	796
24	74,795	115	28,032	100	37.5	45,746	125	61.2	1,017
25	95,382	147	40,875	146	42.9	53,482	147	56.1	1,025
26	93,818	145	40,795	145	43.5	52,088	143	55.5	935
27	91,091	141	43,177	154	47.4	46,795	128	51.4	1,119
28	104,400	161	54,603	194	52.3	48,688	134	46.6	1,109
29	109,603	169	55,879	199	51.0	52,852	145	48.2	872
1930	90,229	139	42,682	152	47.3	46,624	128	51.7	923
31	69,510	107	28,503	101	41.0	39,480	108	56.8	1,527
32	40,205	62	17,151	61	42.7	22,853	63	56.8	201
33	50,827	78	25,409	90	50.0	25,367	70	49.9	51
34	36,100	56	10,969	39	30.4	25,071	69	69.4	60
35	53,229	82	36,975	132	69.5	16,172	44	30.3	142
36	46,144	71	29,809	106	64.6	16,305	45	35.3	30
37	51,718	80	32,052	114	62.0	19,641	54	38.0	25
38	30,783	47	14,335	51	46.6	15,859	44	51.5	589
39	43,420	67	41,792	149	96.3	1,495	4	3.4	133

Returns of Trade and Trade Report の1918年度, *Foreign Trade of China* の1921, 1924, 1927, 1930, 1931年度, *The Trade of China* の1933, 1936, 1939年度による。

i) 上海は南京・鎮江・蘇州・杭州・寧波を含む。

ii) 廣州は江門・三水・九龍・拱北を含む。

iii) 34年以降は 1 kg = 0.0165346 擔 として換算。

た糸廠に二重の打撃を
與えた。そのため、三
二年にはほぼ完全に停
業状態であり、既に一
〇年代に日本式の再繰
式機械を採用し、二〇
年代の後半には洋行を
排した生糸の直輸出に
も乗りだした杭州の虎
林・緯成兩糸廠につい
ても、前者は三五年遂
に廢業・機械取り外し
に追い込まれ、後者も
債務不履行から浙江省
財政廳に差し押さえら
れることとなったので
ある。こうしてどん底
の三四年まで、江浙地
方の製糸業はもはや立

ち直らぬかに見えた。

二 國民政府の蠶糸改良

棉業等とともに、中國の重要産業であり、外貨獲得に大きな役割を果たした蠶糸業の危機に對して、國民政府は無策ではいられた。⁽⁴⁾ まず三二年、江浙糸業公債八百萬元を發行して輸出奨勵と技術改良をはかったが、これは失敗した。上海事變後、江浙糸業公債三百萬元を發行して古繭・古糸の整理、輸出奨勵に充てる一方、生糸輸出税を免除し、人絹及び絹製品の入税を四〇%引上げることとした。即ちこの段階の政策は、滞貨一掃を主目的とした消極策であるが、生糸の場合機械糸（以下廠糸）に限定し、農民の座繰糸（以下土糸）を含んでいないのは、政策の性格を示すものとして注目される。⁽⁵⁾

蠶糸業全般への本格的な取組みは次の段階である。まず三二年江浙蠶糸改進會が組織され、蠶種の統制・農村指導・製糸の改良・養蠶教育及び養蠶試験にのりだした。次いで三三年浙江省蠶糸統制委員會（以下浙蠶委）、翌三四年江蘇省蠶業改進管理委員會（以下蘇蠶委）が組織され、省の建設廳の下で蠶糸改良を推進した。そして三三年全國經濟委員會（以下全經委）の改組の後、翌年その下に蠶糸改良委員會（以下蠶改委）が組織されて、全體の指導に當つたのである。この他に、實業部の蠶糸科もまた蠶糸改良に當つた。

さてこれらの國民政府下の蠶糸改良は、世界恐慌を主要な原因とする市場縮少と、その下での日本糸の壓迫という状況を背景になされたものであるから、その目的は日本糸と對抗しうる國際的競争力をつけること、即ち生糸品質の向上とコストの引下げであり、その實現のためには蠶種・機械等の技術改良とともに、それを効果的に行なうための統制による「合理化」が不可避とされた。⁽⁶⁾ この技術改良と統制は現實の政策では一體となっているが、前者は比較的階級性が薄く、重要な問題である蠶糸改良の性格をより明確に示すものは後者、統制の方向である。

結論を先に言えば、國民政府の蠶糸改良は多くの中小業者を没落させる（蠶種統制は浙江の土種製造業者や投機的な蠶種業者を、繭行統制は舊來の多くの繭行業者と繭商人を）とともに、直接生産者に矛盾を轉嫁する形で（土糸生産農民の切捨て、繭價の引下げ、労働者の労働強化・賃金抑制等）製糸資本と銀行資本の利潤を保證する、ブルジョアの再編であった。しかしながら、この資本主義體制そのものの危機を示す大恐慌の下では、製糸資本・銀行資本も再編を免れることはできなかった。⁽¹⁰⁾ 製糸資本の側では、資本と技術で遙かに優る日本と對抗するために、江蘇と浙江で形の異なる一種の「獨占」⁽¹¹⁾ が形成されるのである。蠶糸改良は同時にこの「獨占」の形成過程であった。従つて本稿では紙數の關係もあり、前記の各機關ごとの改良策を一つ一つ述べることはせず、江・浙それぞれについて、特に「獨占」と關連の深いものを中心に取り扱うこととした。⁽¹²⁾

(1) 江蘇——薛家蠶糸「獨占」の形成

江蘇での蠶糸改良は、既に二〇年代後半頃から無錫の製糸家等による、民間主體の形で着手されていた。⁽¹³⁾ 恐慌後、蠶業については主要には前記蘇蠶委の下で行なわれたが、それは二〇年代に改良に着手していた有力製糸家が蘇蠶委の實權を握り、その統制を背景として質量共に發展させたものである。しかも製糸から先の過程については、蘇蠶委は殆んど關與することなく、有力製糸家自身による再編に委ねられたのである。⁽¹⁴⁾ その有力製糸家とは、李鴻章の片腕薛福成の孫、壽萱を中心とした薛家に他ならない。

薛家は恐慌前、無錫に永泰（本社に相當する）、華新、錦記、永盛の四糸廠と、十數行の繭行を所有していた。恐慌によつて薛家の糸廠も打撃を受けたが、壽萱は岳父の「紡績大王」榮宗敬や中國銀行總經理張公權の援助も得て糸廠を再興するとともに、鎮江と無錫に永泰蠶種製造場を設けて改良蠶種を製造し始め、また養蠶合作社を組織して優良繭の特約取引を始めた。更に永泰糸廠出口部を設立し、中間商社を排してアメリカの業者との直接取引を開始した。⁽¹⁵⁾ こうして蠶種の製

造から生糸輸出まで營業を擴げただけでなく、統制を利用して各部門全てについて、「獨占」を進めていったのである。

ア 蠶種統制

江蘇では養蠶農家の殆んどが自家製の土種によっていたが、それは病毒率が高く、繭作・繭質ともに不良であった。そのため二七・八年頃から改良種が次第に普及しつつあったが、同時に製種業が収益が多いことから製種場が亂立し、粗惡な蠶種販賣もなされるようになってきた。恐慌はこのような状態にあった蠶種を猛烈な勢いで淘汰していったが、蘇蠶委は日本蠶品種を交配した優良蠶種を指定し、特に優良な蠶種には奨励金を支給するとともに不良蠶種を焼却し、上からの過程を促進した。そのため、二八年段階で九五%を占めていた土種が短期間に消滅するとともに、蠶種の病毒率も三〇年の六・四二%から三五年の〇・三七%にまで下っていったのである。

しかしこの強力な統制は恐慌中は蠶種の減産につながり、そこから脱却し始める三五年から甚しい蠶種不足に結果し、大量の日本蠶種を購入せざるをえなくなった。この頃の證言を聞こう。「この時我等の『糸業大王』（薛壽萱のこと——奥村）は正體を現わした。彼はその時既に無錫糸業の牛耳を執っていたが、同時に製種場を開設して製種業の盟主となっていた」。そして彼が蘇蠶委を組織して蠶種統制にあたり、その結果蠶種不足が起ったと述べた後、次のように言う。「自分が蠶種の需要に應じられぬのに、極力他人の製種場を押えて大量製造を許さず、缺乏すれば日本から購入する。國家全體と農民の損失は計ることができぬほどである。これが『蠶種統制』——否、蠶種獨占——の御恵みである」。即ち大きな成果をあげた蠶種統制は、同時に薛家が競争業者を押さえて製種場を自己の下に集中し、「種閥」を形成する手段でもあったのである。但しこの證言について一言しておけば、蠶種不足は回復期の一時的現象であり、三五年から増産を進めた結果、三七年春には江蘇省の掃立能力を百萬枚上回る三百萬枚を用意できるようになっている。

更に薛家にとっては、蠶種統制は農民の優良繭を安價に確保する手段ともなったようである。「蠶種統制」はどのよう

な意義があるだろうか。彼（薛壽萱——奥村）はまず各製種場の蠶種を集中し、同時に各郷鎮の『蠶桑模範區』に指導所を設け、指導員から蠶種を農民にばらまく。永泰糸廠の蠶種（薛壽萱の經營）は、農民が必要とするなら値引き或いは掛賣りしてもらえる。交換條件は繭ができると必らず該廠に賣らねばならぬということであり、そうしなければ罰せられる。農民は毛先ほどの便宜にとびつき、おとなしく彼の罠の中に入ってしまうのである」。

イ 養蠶法の改良・合作社の組織

江蘇では無錫・金壇の二縣を模範區とし、武進・江陰・吳縣等養蠶の盛んな縣に改良區を設け、その中でも特に盛んな地域には中心指導所を設立し、養蠶期には更にその中に指導所を設立して、以下の指導にあたつた。(1)改良種の推行、(2)秋蠶の奨励、(3)消毒の勵行、(4)共同催青、(5)稚蠶の共同飼育、等。これらのうち、(3)以下の指導を受けたものは、三年の掃立枚數で春期一五・一%、秋期一五・九%に達し、前年に比し大幅に増加している。未だ比率はそれほどではないが、従来の非科學的な養蠶法に代る新式飼育法が、急速に普及しつつあることを見る事ができよう。その結果、繭質の改善とともに、生繭一擔當りのコストも低下していった。

さてこうした中心指導所や指導所は、その區域に合作社が設立されると順次廢止されていくのであるが、これらの新式飼育法による繭は、多く蘇蠶委の實權を握っていた薛家に取得されたい。例えば次のように言う。「その頃の養蠶合作社なるものは、法に依つて組織されたものではなく、目的はただ農民の養蠶を指導して、糸廠——薛家と言うべきであろう——にかわつて優良な蠶繭を生産する」ことだった、と。

しかし三五年九月、國民政府によつて「合作社法」が施行されてより後、事態は變化を見る。即ち合作社がこの法に従つて正式に組織されるとともに、農民銀行が合作貸付を推進し、模範區等の組織した合作社に銀行資本の勢力が入つてきたのである。そのため、以前は實質薛家のために存在した合作社が、農民銀行による融資によつて薛家から離れる可能性

が生じた。こうして養蠶農民の支配をめぐって農民銀行と薛家との競争が始まり、薛家は多くの私的な特約取引の合作社を組織して對抗した。「蠶桑模範區は全部で百人以上の指導員を派遣したが、薛氏は無錫一縣だけで指導員百人以上を派遣し、その他の各縣はこの數の中には入っていない。また彼は養蠶合作指導員の講習學校を新設し、三百餘名の女生徒を招いて訓練して需要に應え」たのである。結果は薛家が優勢であり、優良繭の多くはやはり薛家のものになったらしい。それは第一に、無錫乾繭統制の規定では、合作社が共同乾繭し、時期を見て共同販賣する權利を認めてはいたが、窮迫した農民は一刻も早く現金を必要とするために、乾繭せずに各自生繭のまま賣ってしまうからである。そして第二に、次に見るような薛家への繭行の集中、繭價の抑制、糸廠の集中という状況の中では、乾繭して有利な時期を待ったところで、いたずらに銀行への利子と倉庫料の支出を増大させるだけであつた。即ち多くの合作社は自立しえなかつたのである。⁽⁶⁵⁾

では特約取引の場合はどうか。糸廠から蠶種の前貸しを受け、糸廠派遣の指導員の下で共同催青、共同育蠶し、優良繭を生産するが、それはむしろ市場價格以下で一括して糸廠に購入されるという。ここでは農民の養蠶はほぼ完全に自立性を失ない、實質的に糸廠經營の中に組込まれ、原料生産のための資本家的家内労働の如きものに變えられているといふべきであらう。要之、合作社に收斂する養蠶法の改良は、著しく良質の繭を生産したが、それも結局薛家を富ませる方向だったのである。⁽⁶⁶⁾

ウ 繭行統制・繭價統制

繭行とは「省政府の許可を得て乾繭場を設備し、之を製糸家若くは繭商に貸與して購繭せしめる問屋であ」り、合作社からの場合以外には、繭購入は繭行を通さねばならない。この繭行の繭灶（乾燥場）を舊來の土室式から新式の機械乾繭機を備えたものに切り換え、乾繭コストの引下げと品質の向上を達成するために行なわれたのが繭行統制である。そのために繭行開設許可の條件を厳しくする一方、様々な特權を與えて乾繭機の採用を奨励した結果、江蘇には二七年に一臺も

なかった乾繭機が、三六年には一五臺設置されるに至った。⁽⁴⁾ 乾繭機は乾繭コストが低くかつ乾燥にムラがなく、繰折（生糸百斤に必要な繭量）を數十斤減少させるから、統制により技術改良が進んだことは疑いない。しかし繭行統制のより大きな意味は、むしろ多くの繭商人の排除と、蘇蠶委による繭價の統制を有効に行なう點にあったとみられる。

再び當時の證言を聞こう。「繭行統制」はどんな意義があるだろうか。それは準備に若干年をおいた後に、一律に新式の繭灶に改め、繭質の改良をはかるものである。ただしその期間中、模範區の指定する舊灶はしばらく營業を續けられるが、制限は厳しく、薛氏と關係ある繭行主か當地の勢力ある繭商の他は、全て取締まれる⁽⁴⁾。ここでは、統制が薛家の繭行支配に利用されていることを見ることができよう。江蘇省の繭行は七九八家であるが、三五年に實際に開設したのは半數以下にすぎなかった。⁽⁴⁾ そして堀江英一氏によれば、薛家の直接經營した繭行は自有一五、租入八七、計一〇二であるというが、實質的に支配していたのはこれより遙かに多かったらしい。⁽⁴⁾ その結果どうなるか。「昔は各縣の繭行はすぶる多く、收繭時には競争が激しくて、糸繭の巨商も價格を押さえることは困難であつた⁽⁴⁾」が、農民自身による乾繭が實質的に禁止されたこともあつて、蘇蠶委の決定する統制繭價の拘束力が格段に強まることとなる。この統制繭價は、目的が生糸輸出の競争力をつけるためのコスト引下げにあるが故に、養蠶農民の犠牲による低繭價が基本であることは言うまでもない。無論蠶糸改良が一面農村救済策の一環であり、⁽⁴⁾ 養蠶農民の没落は製糸業そのものを崩壊させる以上、最低限は保證せざるをえない。言わば「生かさぬ様、殺さぬ様」のラインが公定繭價の原則であつたと言えよう。薛家はこのような仕組で、蠶種や養蠶法等の技術改善の成果を、農民の手から奪い去つたのである。更にまた、繭行の集中により原料繭も獨占的に支配できることは、薛家の他糸廠に對する決定的優位をもたらすことになる。

エ 糸廠の再編・機械改良

無錫糸廠が深刻な危機に陥つた三二年、江蘇省實業廳長何玉書は、國民政府實業部の譚熙鴻とともに無錫を訪れ、直面

している危機に對して繭市救済等の四つの對策を示した後、最重要の課題として糸廠の整理をあげた。これを受けた無錫糸廠業同業公會の全體大會では、舊來のイタリア式機械の墨守と勞務管理の管車制が製品を不良にし、アメリカ市場に適合しないことが中國糸失敗の最大原因であるとして、租廠制の嚴禁・管車制の廢止等とともに、機械改良の必要が強調された。更に、そのためには數十萬乃至百萬元以上の資金が必要であることから、主席の錢鳳高の主張どおり、數廠乃至十數廠を連合して一廠とし、資本を集中することが強調されたのである。このような動きを念頭に置いて、以下製糸機械の改良を見てみよう。

まず繰糸機では、當時最先進の多條機は二〇年代後半には薛家の華新にしかなかったが、抗日戰爭直前には同じく薛家の永泰・永盛と薛系の宏餘、更に薛家よりも浙蠶委とつながりの深い瑞綸（玉祁）の五糸廠に一一五八釜存在し、無錫全釜數の七・三%、抗日戰前に營業していた釜數の八・三%に達していた。但し後に見る浙江ほど普及していないのは、多額の資本を要する機械改良が、殆んど民間に任せられたからであろう。乾燥裝置との關連では、二〇年代末には大部分がイタリア式の直繰式で、特にアメリカ市場向けに必要な揚返機を備えた日本式の再繰式は一部に過ぎなかった。しかし日本侵略後の調査によれば、無錫では三分の二の糸廠が揚返機を備え、残りの糸廠についても、振元・泰孚・永昌・森明といった糸廠は自らは小枠に巻きとり、薛家の華新・永泰兩廠に揚返しを依頼していた。即ち「少くとも無錫城區に於ては事變直前には直繰式の工場が跡を絶つてゐたといつても過言ではな⁵³」い狀況になつていたのである。更に二七年には一臺しかなかった煮繭機は、三六年に江蘇全體で五六臺に達している。⁵⁴

さて、このような急速な機械改良の前提をなしたのが、薛家による糸廠の集中である。堀江英一氏によれば、抗日戰爭前に薛家が經營していた糸廠は、自有が永泰・華新・隆昌・錦記・永盛・鎮綸の六廠、租借が振藝・泰孚・永裕・民豐・鼎昌・寶豐・鼎盛・裕盛・永昌・三新・振元・泰昌の一二廠、都合一八廠であるという。これは無錫五一廠中のほぼ三分の一にあたる。しかし薛家が實質的に支配していた糸廠は、これにとどまらなかった。それを示すものが興業製糸股份有

限公司（以下興業公司）の設立である。

三六年二月二〇日の『申報』紙上に掲載された株主募集廣告によれば、この公司設立の目的は「經濟の人才を集中し、原料品質を改良し、製糸技術を改進し、精神を團結させ、製造を統一し、コストを下げ、市場擴大に努め」て、中國糸をして國際市場での榮えある地位につかしめることにある、という。資本金は百萬元、原料採取と生糸及びその副産品や生糸關係の製品の製造・販賣をもって營業内容とする。ここで注目されるのは、發起人が薛家の薛壽萱・薛祖康・薛潤培の他、錢鳳高（無錫糸廠業同業公會主席、鼎昌糸廠經理人。以下糸廠名のみ記す）、王化南（乾新一・二、乾利）、鄭海泉（瑞昌一・二）、程炳若（乾姓・五豐）、張季芳（美豐・美新）、鄭炳泉（瑞昌永）、曹少臣（廣成）、張仲厚（大成）等、無錫の有力製糸家をほぼ總動員していることであり、先に示した三二年の糸廠整理案を全無錫規模で實行した形になっていることである。當時、「トラスト」の出現と騒がれたのも無理からぬと言えよう。但し殘念ながらこの興業公司については、現在のところ斷片的な史料しか見出だせず、その實態は今後の検討課題としなければならぬ。ここでは一史料のみ提示しておく。最近一・二月以來、無錫の薛壽萱と王化南・程炳若等が資本を合わせ、既に無錫全縣の糸廠三〇餘家をことごとく租借し、薛氏一人の指導・改進を受けようとしている。同時に最近の上海の新（聞報？）申（報？）各大新聞は、薛氏等の發起した興業製糸公司が資本百萬元を公開招募するというニュースを載せている。當然これは對外公開を示した表看板であって、内部資本は既に充實しているのではなからうか。というのは薛氏個人が去年のもうけの十分の一を出すだけで、もう獨占できるからである。ここには興業公司が既存の糸廠を租借して經營していることと、形の上では無錫製糸家の大同團結であるが、實權は薛家にあったことが示されている。この興業公司が經營した糸廠の數はここには「三〇餘家」とあり、他史料では「四〇餘家」とあつてはつきりしないが、薛家直營の糸廠を合わせれば、當時操業していた糸廠の大部分となることは確かである。そして重要なことは、興業公司の設立が單に糸廠の集中のみを示すだけでなく、傘下の糸廠の繭行をも薛家の支配下に置くことにより、先に述べた薛家の繭行支配を完成させ、繭價の抑制を完

全なものとすることである。同年六月四日の『申報』は、無錫縣農會の言として次のように傳えている。「繭行業同業公會は、現在無錫に新しく興った糸廠トラストに左右されており、五月三一日に會員大會を舉行した時、故意に生繭價格を（一擔當り——奥村）三〇元に押し下げた。そして農會は四〇元上げることを求めたが、この繭價問題は、蘇蠶委主席が薛壽萱・薛祖康と會談した後に出了された妥協案、三三元で押切られたのである。即ち興業公司の設立こそ、無錫、否、江蘇の蠶糸業の再編——薛家の獨占の支配の完成を示すものであった、と言えよう。」

オ 生 糸 輸 出

二〇年代の上海での生糸輸出は、浙江の緯成・虎林兩廠が自ら輸出商社を經營している他は、殆どどの糸廠は糸問屋を介した、洋行による輸出に頼らざるをえなかった。そして半植民地中國の糸廠は、洋行に對して對等な立場に立ちがたく、極めて不利な條件で取引せねばならなかった。この生糸輸出改善の重要性は蘇蠶委も認識していたが、浙蠶委のように自ら輸出商社を經營することはなかったようであり、それに代つて實行した形となつたのが、薛家の永泰糸廠出口部である。これは三二年に設立され、ニューヨークに事務所を置いて社員を常駐せしめ、販路開拓に當つた。そしてアメリカ・フランス兩糸場に現物を貯藏し、糸價を眺め買主を選びながら有利な取引を行なつたのである。この永泰糸廠出口部の取扱つた生糸は、三三年迄は千俵（約千擔）以下であつたが、生糸年度（當該年度の六月から翌年五月まで）の三四年度に上海港輸出廠糸の一七%を占めて後、絶對的にも相對的にも急増し、抗日戰前最後の三六年度には、遂に上海港輸出廠糸の三分の一弱、三二・五%を占めるに至っている。この數字が華新・永泰等、言わば薛家直系の糸廠の他に、先の興業公司の製品をどの程度含んでいるのか明らかではないが、少くとも取扱高の急増が、江浙地域での薛家の地位の上昇を反映していることと見ることができよう。同時にそれは當然洋行を排除することになるから、中國製糸業のガンとされた生糸輸出の洋行支配、及びそれを通しての中國糸廠の洋行への從屬という現象は、抗日戰前に急速に後退しつつあつたと言ふこ

とができる。

小 結

以上のように、江蘇省における蠶糸改良は、急速な技術の改良と薛家による「獨占」が並行した點に特徴がある。この薛家の「獨占」の背後には、張公權や榮宗敬の援助があったが、この時期に形成される所謂官僚資本、特に後の「四大家族」との具體的な關係は、現在の所明らかにはしえない。但、抗日戦後に中國蠶糸公司を支配したCC系の「發源地」江蘇農民銀行とは、合作社をめぐって競争の立場にあったことを知るのみである。むしろ現段階では、早急な系列化は慎むべきであらう。

(2) 浙江——連合糸廠計劃

浙江においても、江蘇以上に蠶糸改良に力が入られている。但し浙江の絹業は江蘇より起源が古く、明末清初頃既に相當發展しており、言わば傳統の重みとでも言うべきものを背負っていたことが、浙江に獨自の方法をとらせることとなつた。その第一は製種が養蠶と分離し、土種製造業として獨立しており、蠶種の改良に對して根強い抵抗力を持っていたことである。第二に農民の養蠶の目的は、開港後特に上海・無錫の糸廠設立後に發展した無錫付近のような繭販賣ではなく、自ら繰糸し土糸の形で販賣することであつた。しかも第三に、この地に發展した手織りの絹織業が、この土糸を原料としていたが故に、繭行の設置を妨害し、原料繭獲得が困難なために糸廠の發展が遅れざるをえなかつた。それ故二〇年代から蠶糸改良の動きはあつたが、「江蘇省ノソレトハ趣ヲ異ニシ全ク官辦ノ一途ニ出ヅ」と評される状況だったのである。そして第四に、一〇年代後半からようやく糸廠が發展し始めるが、それは機械絹織物業の勃興にともなうものであり、緯成・虎林といった二〇年代の浙江を代表する糸廠も、もともと親會社の原料製造部門として創設されていることで

ある。⁽⁷³⁾ 従つて三〇年代には、恐慌によつて國外市場を失つただけでなく、親會社の不況と中國への人絹流入の影響を直接に受けることとなり、自力では立直り難い打撃を受けることとなった。こうした事柄が、三〇年代浙江の蠶糸改良をして、江蘇以上の上からの強力な統制によらしめた要因となった。ここでは蠶種から生糸輸出まで、主役は浙蠶委である。

ア 蠶種統制

浙江の蠶種統制は基本的には江蘇と同じであるが、浙蠶委が一括して省内外の改良蠶種を購入し、買收價格より相當低額で農民に配布するという方法をとった。しかし三五年頃からの蠶種不足は江蘇以上にひどく、江蘇や日本から大量に輸入してもなお足りぬため、土種の制限を緩和せざるをえなかった。ために病毒率も減少したとはいえ、江蘇より高い。これに對處するため浙蠶委は優良種の増産を進めた結果、三九年には需要額四百萬枚を自給できる見通しとなった。⁽⁷⁴⁾ こうして土種を驅逐する一方、改良種繭の農民自身の繰糸を禁じたことは、この政策が廠糸本位であり、土糸切捨て策であることを明白に示している。

イ 養蠶法の改良・合作社の組織

三五年の被指導戸數は、春期八萬九千、秋期七萬一千、掃立枚數では春期三九萬枚、秋期二〇萬枚であり、前年に比し春は戸數で一・四倍、枚數で二倍の増加となっているが、秋はともにやや減少している。これはこの年の改良種の掃立枚數のそれぞれ五〇%、四八%に相當するが、この段階ではなお土種の掃立ても多いため、總掃立枚數に對する比率はかなり低下するであらう。合作社については、春期は三三年の七七社から三六年の五一五社に大きく増加しているが、秋期は同二三三社から二六四社と、微増に止つてい⁽⁷⁵⁾る。

ウ 繭行統制・繭統制・繭價統制

乾繭機を備えたもの以外は既存の繭行から二〇里（一〇キロ）以内の新設を認めないこととした以外に、浙江の繭行統制そのものは、江蘇と基本的に同じである。⁽⁸⁰⁾ 乾繭機の普及については江蘇以上に奨励し、三六年には浙蠶委が仲介した銀行からの融資によって設置せしめた結果、三七年には前年の二倍の四五臺に達している。⁽⁸¹⁾

しかし浙蠶委は繭行統制にとどまらず、繭購入への全面的統制に進んだ。まず三四年春には、繭購入に際して希望購入量・場所等を登録させたいうで、許可を省内糸廠・省外糸廠・省内繭商・省外繭商の順で與えた。ここには省内業者優先以上に、明らかに流通過程を握る中間の繭商を排除し、原料繭を糸廠に直結させようとする志向が見られる。更に糸廠も「信用良好ナルモノヲ以テ優先」とすることにより、結果的に大糸廠擁護の方針となっている。⁽⁸²⁾ 同年秋からは更に一步進んだ。糸價低落のため繭購入量の少なきを見た浙蠶委は、中國・交通等一四銀行が結成した銀團から三百萬元の融資を得、自ら繭買付けを行なったのである。⁽⁸³⁾ 翌三五年にはこれを法制化した。即ち春には省内を一〇の收繭區に分け、うち六區は區内糸廠の一定數量の購入を許した以外は全て浙蠶委が購入し、残り四區は數量を登録させ、浙蠶委の監督の下で省内外の糸廠に購入させたのである。⁽⁸⁴⁾ この時の浙蠶委の購繭は全て改良種繭であり、全購繭量の二〇%、改良種繭の實に四七・六%に相當する。⁽⁸⁵⁾ 更に浙蠶委は同年秋にも四〇%、晚秋期には全ての繭を自ら購入した。⁽⁸⁶⁾ その結果三五年に浙蠶委の購入した生繭は八八三〇六擔、同年浙江全購繭量の二三・七%、改良種繭の四五・八%を占めたのである。

このような浙蠶委自身の大量購入を含む強力な統制が行なわれた理由の一つは、江蘇と同様に繭價統制の實效を高めることにある。三四年秋の購入は確かに繭價の最低限以下への低落を防ぐ意味があったし、特に農民の養蠶を土糸販賣から繭販賣に切換えさせる必要のあった浙江では、改良種繭の最低限の價格保證は不可欠であったと思われる。⁽⁸⁷⁾ 三六年春には、上海の糸廠・繭商の購入價格が統制繭價を下回ったことを理由に、購入繭の差押えを行なっているが、それもこうし

たことと關係してゐるであらう。二五年の場合には、逆に糸價上昇による原料繭の競争買いを強引に押え、繭價上昇を防ぐ意味もあった。この時江蘇では「晩場は競争買の態となり、繭價は昂騰したが、浙江省では……買馴れは殆んど公定繭價に等しかった」と言われるように。

しかしなお問題は残る。浙蠶委自身の購入した大量の繭はどうなるのであろうか。三四年秋の「秋繭繰糸辦法」第一條は次のように言う。浙蠶委「ノ買付ケタル秋繭ノ一部分ハ原價ヲ以テ本省各糸廠ニ譲與シテ製糸セシメ其ノ他ノ部分ハ本辦法ニ依リ江浙連合糸廠ニ交付シ代ッテ繰糸スル責ヲ負ワシム」。この江浙連合糸廠こそ、浙蠶委の統制の方向と蘇蠶委以上の積極さの理由を解く手懸りとなるであらう。

エ 糸廠の再編・機械改良・生糸輸出

恐慌の最中の三三年、江浙蠶業連合統制委員會において、一〇年代末頃上海の糸廠經營で活躍した莫觴清は、大約以下のように提案した。中國糸業が復活するためには、日本と競争してその市場獨占を破らねばならず、そのためには江蘇・浙江・安徽の蠶糸業者と政府が一致團結する以外にない。即ち官民合辦で規模壯大な糸業トラスト、假稱「中國江浙皖繰糸貿易有限公司」を設立し、蠶種から生糸販賣までこの地の蠶糸業を獨占的に請負わしめ、技術の改善をはかるべきである。

この莫の提案は該委員會の一致賛同を得、關係方面で具體化の検討が始められたという。翌年蠶改委が組織され、そこで計劃された江浙連合糸廠は、その小規模でより現實的な具體化とみることができよう。これは蠶改委の指導の下に、江浙兩省の糸廠を連合し、糸質を統一・改良しようとするもので、三五年春に成立する豫定であった。二四年一〇月段階で一〇餘家が加入の準備をしていたという。翌三五年二月、計劃はより具體化する。それによれば、蠶改委の下に江浙連合糸廠指導委員會を成立させて、以下の原則に基づいて指導に當らせることとした。(一)共同收購、(二)技術合作、(三)管理合

作、(四)機械改良、(五)事務所の設立。⁽⁸⁾

このように江浙連合糸廠は、もともとは上海を含む江浙兩省の糸廠再編策として計劃されたものであるが、次第に浙江省がヘゲモニーを握る浙江中心の再編策となつていった。それは連合糸廠の指導原則と同時に決定された、全經委が糸廠の機械改良に充てた資金、一三萬五二四〇元の内譯と使用法に既に現われている。まず最先進の多條機五百臺は、蠶改委が購入して「連合糸廠中之浙江各廠」に貸與された。⁽⁹⁾ 惠綸・慶雲・開源・杭州(省政府直營)・緯成鶴記(緯成の嘉興分廠、浙江建設廳に差押えられている)の五廠がそれである。ここでは第一に「連合糸廠」と明記していること、第二に浙江に限定されていること、第三に機械の所有主は糸廠ではなく蠶改委であること、が注目されよう。これに對して、多條機以外の援助は、「連合糸廠」とは明記されず、上海を含む江蘇の糸廠に對しても行なわれたが、その方法は糸廠自身の自主的な機械改良に對して、必要資金の半額を貸付けるという資金援助の形である。杭州と無錫薛家の華新・永盛三糸廠の再繰車設置、慶雲と江蘇浙墅關の女子蠶桑學校(女蠶)兩糸廠の煮繭機設置がそれである。この他に開源・惠綸のボーラー燃料設備にも資金貸與がなされた他、杭州には別に二萬五千元が貸與されている。⁽¹⁰⁾ 即ち蠶改委の機械改良の援助は、浙江に對して、江蘇より厚くしかも上からの指導性の強い形でなされているのである。それは、先に示した江浙連合糸廠の指導原則の(四)の具體化であるとして、誤りはあるまい。

では(一)の共同收購はどうなるのであろうか。言うまでもなく、前記の浙蠶委自身の購繭以外にはない。事實三四年秋蠶の繭は、先に記したとおり江浙連合糸廠に代繰させると明記しているのである。具體的な糸廠名はわからないが、前記の浙江の五糸廠を中心としていることは疑いない。但し問題なのは、次の三五年春蠶の浙江「繰糸辦法」では江浙連合糸廠の名は消え、希望糸廠の中から浙蠶委の指定する「設備・技術の比較的良好な」糸廠に代繰させることとなっていることである。この一方で江浙連合糸廠の計劃は放棄されていない。同年一月付の『全國經濟委員會工作報告』に、「江浙兩省の糸廠で加入しているものが頗る多い」と報告されているからである。この年、江浙連合糸廠が維持されて大規模

な共同收購、技術合作がなされたとすれば、それはやはり浙蠶委の代繰糸廠しか考えられないが、兩者の關係はどうなっているのだろうか。

その點で興味深いのは、次の史料である。浙蠶委の一九三五年第四次常務委員會では、「(民國)二四年秋季收購統制管理方針案」の決議(乙)として、次のようにいつている。「政府收購問題に關して。……政府が惠綸・開源・杭州・慶雲・東鄉合作・緯成鶴記・瑞綸・振藝の八家の基本糸廠を維持し、明年の春繭を迎えるには、最少限乾繭一萬擔を收買すべきである」。即ち蠶改委から多條機を貸與された前記浙江の五廠と東鄉合作、及び無錫の非薛系の瑞綸(玉祁)・振藝(後に薛家の支配下に入る)計八糸廠の維持に必要な繭量が、浙蠶委の收買豫定繭量の基準となつていたのである(ちなみにこの年の春蠶は、この八糸廠に緯成の加わつた九糸廠と、江蘇潛墅關の女蠶、無錫の永盛・鼎昌、上海の怡和で代繰されている)。更にこの會議では、「糸廠連合組織」として、先にあげた八糸廠から振藝を除いた七糸廠をあげ、これ「等の廠を基本單位とし、その他の糸廠で加入を願うものは、調査のうえ加入を許可する」ことを決議している。こうしたことから、代繰糸廠はこの七乃至八廠を中心としており、それらは「糸廠連合組織」を形成していることが明らかになろう。とすれば、全經委に報告された江浙連合糸廠は、この「糸廠連合組織」か、それに春蠶時に代繰した江蘇の糸廠を加えた、代繰糸廠全體のいづれかとなるであろう。前者の場合、江浙連合糸廠は言わば通年的に存在し、結合は強いが、後者の場合は一時的であり、春蠶時に加わつた江蘇の各廠との結合は弱い。後に見る史料から判斷すれば後者であると思われるが、いづれにせよそれは、浙蠶委の購入した繭を原料とし(共同收購)、浙蠶委の派遣した技術員の嚴密な指導・監督の下で、浙蠶委の製品として均質な高級輸出生糸を生産する(技術合作・管理合作)ことが中心の組織であつた。その前提として蠶改委が機械改良援助(特に多條機の貸與)を行ない、「技術・設備の比較的良好に整つた」糸廠としていた(機械改良)のである。これらの技術員の養成は、全經委から二萬五千元の貸與を受けた杭州糸廠が中心となつた。ここでは代繰の名の下に、製糸資本家は工場と労働者を貸した形になり、實質的に經營しているのは浙蠶委なのである。なかでも

浙蠶委の「糸廠連合組織」に加入した糸廠の場合、江蘇の各廠よりも從屬性はより強いと言えよう。もちろんこれらの糸廠も、代繰とは別に自分で購繭して繰糸してゐるのであるが、浙江の繭の二〇%、優良な改良種繭の四〇數%が浙蠶委の手中にあるのであるから、これら糸廠内での代繰部分の比率はかなり高いし、危険は浙蠶委が負うことになるから、多くは代繰に重きを置くようになった。三六年の記事に次のようにある。「緯成・鶴記・慶雲・惠綸等の糸廠の如きは、政府が既に自ら新繭を收買したので、もともとの收買を登記した繭を放棄し、昨年の例に照らして代繰糸廠となり、代繰の責を負うことを願う旨、決定した」。

その三六年、今度は浙蠶委が多條機千二百餘臺・揚返車九百餘臺・煮繭機七臺を購入し、杭州・慶雲等浙江の一二糸廠に貸與して設置せしめ、優良糸廠としていった。このような蠶改委・浙蠶委による積極的な機械改良によつて、抗日戦前の浙江製糸業は、無錫以上にその面目を一新することとなった。三〇年と三七年春を比較すると、糸廠數は二五から三二に増加し（三七年新設二）、なお一廠が建設中であつた。機械は一釜もなかつた多條機が二一五〇釜となり、全釜數の二五%を占めて無錫を追い抜くとともに、揚返車を備えた糸廠は八（三二%）から二〇（六二・五%）に増加した。煮繭機もまた五臺から三二臺に増加し、三分の二の糸廠が設置してゐた。

こうした糸廠の機械改良を背景としたこの年春蠶でも、浙蠶委は自ら一〇萬三千擔の生繭を購入し、「品質を改良し品種を統一して國外販賣に便ならしむるため、再び江蘇省内の比較的設備のよい糸廠を連合し、合わせて江浙連合糸廠を組織し、會より専門の技術員を派遣して製糸技術方面の指導工作に當らせることを決定した」。この年、無錫では先述の興業会社が組織されており、前年春に代繰した永盛・振藝・鼎昌も薛家の支配下に入つたため、江浙連合糸廠にも大きな變更があつたと思われるが、残念ながら具體的な形はわからない。この年に浙蠶委の援助で機械改良を行なつた浙江の糸廠が、新たに加わつたであろうことを推測するだけである。但し注目すべきは、浙蠶委の組織した生糸推銷會が、この年の六月に出口部を設立し、代繰させた生糸の一部を洋行を通さず直接輸出したことである。それは生糸年度の三六年度には、

上海生糸輸出高の七%、白廠糸の八・七%を占めるに過ぎないが、大成功を収め、翌年から更に發展するものと期待されていた。¹¹²

小 結

以上のように、江蘇では一應民間資本家主導の形で再編が行なわれたのに對し、蠶改委との結びつきがより強い浙江では、全くの上からの再編となり、事實上の省營の企業がその中心に位置することとなった。省政府や浙蠶委内の人脈・金脈を明らかにしない現段階では、その嚴密な分析、性格規定はこれまた課題とせざるをえない（通説となっている許滌新の分類に従えば、地方官僚資本ということになるのであるが）。¹¹³ただ確かなことは、それに對して貸付けという形で財政的に支えたのが、中國・交通兩銀行であることであり、これまでのように全經委の資金が少ないことをもって蠶糸改良の効果なしとすることは誤りである。

さてこの浙蠶委の製品は、嚴重な管理の下で優良繭を優良糸廠に繰糸させたものであるから、品質はとびきり上等であり、海外で大好評を博した。¹¹⁴その限りでは大成功と言えるが、決して順風満帆ではなかった。同時に國內外の強い抵抗も受けることとなったからである。その一つは浙蠶委の直接輸出に脅威を感じた洋行からである。生糸年度の三六年度の直接輸出は、浙蠶委は代繰させた生糸の一部に過ぎなかったが、永泰とあわせて上海生糸輸出高の三三・四%、白廠糸の四一・二%に達した。永泰が更に輸出量を増大し、大成功に味をしめた浙蠶委が大部分を直接輸出に切換えれば、洋行は結果として排除されることになる。そのため上海輸出公會會長は、ニューヨークのアメリカ生糸輸入公會に手紙を出し、浙江省政府の生糸販賣擴張機關と取引しないよう申入れ、直接輸出を妨害した。¹¹⁵

しかしより強く抵抗したのは、上海の糸廠とそれに結びついた繭商である。無錫繭は一應競争の形はとるが、その多くが薛家を中心とする無錫糸廠に押さえられるから、上海の糸廠は浙江産の繭を、しかも資金薄弱なため多く繭商を通して

小口で購入せざるをえなかった。しかしその浙江で繭商が原則的に排除され、浙蠶委自身が購繭したうえで省内糸廠に優先的に購繭させるならば、省外糸廠の買い得る繭の量は限られてしまう。しかもその中で「信用良好ナルモノヲ以テ優先」すれば、怡和等ごく一部を除き、無錫の糸廠の後にまわされてしまうのである。何故なら三十七年一月の段階で上海には多條機は一臺もなく、「寶泰・怡和・積餘・中興等五〇六廠が既に半新式の再繰式に改裝している以外は、多數は依然として數十年前のイタリア式機械で繰糸している」と言われる状況だったからである。即ち上海の糸廠はこの段階でも投機性、洋行への從屬を拂拭していなかったが、國民政府の蠶糸改良は、結果として、このような上海の糸廠を切捨てる形となった。そのため、「本年浙江省産の乾繭は二萬餘擔に達するが、上海の糸廠の用に供されるのは三千擔にも及ばない」と言われる状況の中で、繭商の繭價は暴騰し、上海の糸廠の殆んどは、三五〇六年の糸價の回復を指をくわえて見送らなければならなかった。加えて、浙蠶委の統制下にある連合糸廠が「このように科學的な管理の下にあっては、上海の糸廠は自らこれと競争はできない」、彼らが「國營の力量で民營の事業と競争することは、情においても理においても、民意にかない難い」と、猛然と浙蠶委を非難したのは當然と言えよう。これに對して浙蠶委は、蠶種の増産を進めて繭量の増加をはかる一方、自身が購入する量は二〇%に過ぎないし、代繰させる優良糸廠も江、浙、上海の差別はしていないと辯解した⁽¹²⁰⁾が、それで納得させられる筈はない。折も折、三十七年春は氣候不順のため、繭は甚しい凶作となった。その結果、浙蠶委はついにこの年の春繭の自己收買を放棄せざるをえなかったのである。これは一時的な措置であり、また省營の杭州糸廠を始め連合糸廠の各廠に優先的に購繭させることは可能であるから、江浙連合糸廠計劃そのものの放棄は意味しないが、大きな打撃となったことは確かであろう。しかしこれ以後の動きを辿ることはできない。蘆溝橋事件がもう目前だからである。

三 製糸業の回復傾向

以上見てきた江・浙の蠶糸改良は、如何なる形に結果したであろうか。まず指摘されるべきは、技術の急速な向上である。木暮槓太氏の報告によれば、改良蠶種の普及と養蠶指導により、繰折は著しく減少し、加うるに機械改良によって繰糸能率も大幅にアップした結果、女工一人當りの一日繰糸量が二七〇八年頃の六四匁から三〇〇匁にまで増大し、コストを四分の一以下に引下げることが可能となったという。¹²³この技術水準は最高レベルであり、全てがここまで到達した譯ではないが、蠶糸改良による技術向上が、コストの引下げを導いていることを見るができる。品質においても、連合糸廠系統の生糸も薛家の華新・永盛等の製品も、極めて好評であったという。¹²⁴それは繭質の向上とともに、機械が再繰式になることによつて梓角部分の固着がなくなり、絹織業の機械化（特にアメリカ市場）に適合できるようになったからである。更に多條機の使用は、糸條班（生糸の太さの不揃いによる縞）の點數を著しく高めている。こうしたコストの低下と品質の向上によつて、中國糸の國際市場における競争力は強まっていった。

史上空前の大恐慌も三二年頃最低點に達し、景氣はキナ臭さに比例する形で回復していった。これにともない、糸價も三五年になつて次第に回復の兆しをみせ、糸廠は續々營業を再開した。更に同年一月の幣制改革により外國爲替相場は暴落し、生糸輸出は大幅に伸びることになった。¹²⁵但しこの年迄の蠶業の不振による桑田減少は桑不足を招來し、蠶種また統制と相まつて大幅に不足したため、深刻な繭不足を引き起こした。しかしともあれ、江浙地域の機械製糸業の回復は上海港の輸出量に現われている。第一表を見よう。これによれば、恐慌による打撃は上海地域の方が廣東より大きかったことがわかるが、三五年から兩者は對照的な動きを見せている。上海地域ははっきり立直りを見せているのに對して、廣東はむしろ一層衰微しているのである。上海地域も三六年にやや減少しているが、三七年には再び増加している。この年の後半は日本の侵略があり、殆んどの糸廠が停業していることからして、三五年を上まわる勢いであつたことは確かである。¹²⁶では上海地域内ではどうか。直接生産量で比較はできないが、第三表によれば上海市は二〇年代より衰微しているのに對し、無錫・浙江は發展して、完全に上海を凌駕しているのを見てとれよう。又、輸出先を見ると、第二表によれば、三五

第二表 上海港廠糸仕向先別輸出高

	アメリカ 向	廠糸輸出 中の%	ヨーロッパ 向	廠糸輸出 中の%	その他	廠糸輸出 中の%	生糸輸出 中の%
1909～13の平均	5,514	23.9	17,603	76.1	—	—	32.4
14～18 //	13,455	41.7	18,632	57.7	193	0.6	49.4
19～22 //	16,019	48.1	17,222	51.7	87	0.2	55.0
23～27 //	20,225	39.5	30,433	59.4	554	1.1	66.7
27～28年度	24,560	38.5	38,026	59.6	1,207	1.9	68.1
1932	12,728	42.4	15,469	51.5	1,823	6.1	71.5
33	12,166	49.8	11,612	47.6	635	2.6	70.0
34	6,608	44.3	7,667	51.4	643	4.3	72.2
35	22,912	55.9	17,662	43.0	450	1.1	79.2
36	24,103	58.1	16,693	40.2	724	1.7	87.3

Aは蠶糸業同業組合中央會編『支那蠶糸業大觀』412頁より作成。

i) 廠糸は白廠糸と黃廠糸。生糸輸出はこれに白糸、白經糸、黃糸、黃經糸を加えたもの。

ii) 單位は俵。1 俵はほぼ1擔に相當する。

iii) 27～28年度は兩年の平均か、27生糸年度か不明。その他は曆年度と思われる。

Bは興亞院華中連絡部『中支那重要國防資源生糸調査報告』99頁より作成。

i) Aの場合と同じ。

ii) 單位は擔。

iii) 生糸年度。

年から歐洲向けも伸びてはいるが、北米向けの伸び率の方が高く、その地位を逆轉させている。こうしたことから、三五年以降江・浙地域での機械製糸業の回復は著しく、しかも市場を次第にアメリカに移している、と言うことができる。

ではそれは日本との關係で、如何なる意味を持つであろうか。三五年に一旦盛返した世界生糸總消費量は、以後年々減少し、その壓倒的部分を占めるアメリカにおいても、第四表のように輸入總數は逐年減少している。これにともない日本糸の輸入量も減少している。ところでアメリカ市場では、日本糸は主として細糸一四中上物で靴下に使われ、中國糸は主要に太糸二一中物で廣幅織物に使われていた。これは中國糸の品質が劣ること、特に類節（生糸の節）缺點が多いことが、靴下に不向きであったためである。従つて第五表のように、靴下での消費量はむしろ増加傾向にあり、逆に人絹の影響を受ける廣幅織物が大きく減少している狀況は、常識的には日本糸に有利で中

第三表 中國機械製糸業の變化

		糸 廠 數		煮 繭 機		乾 繭 機		檢 驗 機	
地 方 別		1927年	1936年	1927年	1936年	1927年	1936年	1927年	1936年
		(廠)	(家)	(臺)	(臺)	(臺)	(臺)		(臺)
浙 江	江 蘇	21	31	3	34	2	21	—	32
上 海	蘇 州	44	57	1	56	—	15	—	43
四 川	市	102	49	—	24	—	2	—	13
廣 東	川	18	21	1	13	—	1	—	12
そ の 他	東	202	120	—	3	—	1	—	5
	他	14	12	—	—	—	—	—	—
計		401	290	5	130	2	40	—	105

糸 車 數

地 方 別		1927年	1936年	樣 式 別	1927年	1936年
		(部)	(部)		(部)	(部)
浙 江	江 蘇	4,846	8,224	20 緒 多 條 機	—	3,086
上 海	蘇 州	11,974	16,525	15 緒 多 條 機	—	128
四 川	市	25,127	11,120	日 本 式	1,500	6,658
廣 東	川	4,432	6,374	改 良 イ タ リ ア 式	95,605	69,218
そ の 他	東	95,605	60,342	イ タ リ ア 式	47,991	25,999
	他	3,112	2,415			
計		145,096	105,000	計	145,096	105,089

『十年來之中國經濟建設』上編第五章第五節蠶糸改良6～7頁より作成。

i) 江蘇は殆んど無錫である。

ii) 糸車數の1936年の計は地方別と様式別で若干數が違うがそのままにしておいた。

iii) 糸廠數は單位が廠・家と區別してあるが、ほぼ同じものと見てよいと思われる。

iv) 多條機・日本式の増加、イタリア式の減少は、ほぼ江・浙の現象である。(上海市の糸車數の減少もイタリア式の減少の原因である)

v) 改良イタリア式は廣東の糸廠の機械であるが、1936年には江・浙・上海の一部の糸廠がこれを採用した。

國糸に不利である筈である。にもかかわらず日本糸の輸入量は先述のとおりであるに對して、廣東糸も含む中國糸の減少はさほどではなく、むしろ三七年には後半に侵略を受けながら前年より増加させている。とすれば、ここから導きだされることは、人絹によつて廣幅織物から驅逐された部分は殆んど日本糸であるということか、或いは中國糸が靴下に侵入しているといふことかのどちらかである。いずれにせよ中國

第四表 アメリカの生糸輸入先

	A. 總數	B. 日本糸	B/A×100	C. 中國糸	C/A×100	D. 歐州糸	D/A×100	E. その他	E/A×100
1904	133,592	62,280	46.6	23,574	17.7	40,259	30.1	7,479	5.6
09	152,800	89,681	58.7	30,633	20.1	30,923	20.2	1,563	1.0
14	195,082	136,628	70.1	38,079	19.5	19,953	10.2	422	0.2
18	353,454	250,204	70.8	80,798	22.9	21,766	6.1	686	0.2
24	443,532	351,415	79.2	65,681	14.8	17,055	3.9	9,381	2.1
29	495,304	375,331	75.8	93,026	18.8	26,095	5.2	852	0.2
1934	422,852	412,419	97.5	8,269	2.0	847	0.2	1,317	0.3
35	507,561	478,268	94.2	26,134	5.2	3,082	0.6	77	0.0
36	452,720	417,634	92.2	18,500	4.1	16,243	3.6	343	0.1
37	433,618	404,364	93.3	20,603	4.7	8,631	2.0	20	0.0
38	413,952	384,924	93.0	11,794	2.9	17,072	4.1	162	0.0

東亞研究所『支那蠶糸業研究』404～5頁より作成。

- i) 單位は擔。但し1ポンド=0.0075擔として換算。
- ii) 29年までは當該年の7月より翌年6月に至る期間（事業年度）。
- iii) 歐州糸は殆んどイタリア糸である。

第五表 アメリカ種類別生糸消費量

年 度	總 消 費 量	靴 下	%	廣 幅 織 物	%
1934	461,706	212,388	46.0	249,318	54.0
35	497,143	248,664	50.0	248,479	50.0
36	454,640	266,660	58.7	187,980	41.3
37	425,299	292,140	68.7	133,159	31.3
38	411,794	282,436	68.6	129,358	31.4

東亞研究所『支那生糸の世界的地位』18頁より作成。

- i) 單位は俵。
- ii) 原表では1938年の廣幅織物は139,358俵となっているが、總消費量及び%と合致しないので、本表の如く修正した。靴下消費量は他の統計とも合致するので、總消費量、%の方が誤っているとするならば、總消費量は421,794俵となり、靴下、廣幅織物の%はそれぞれ67.0、33.0となる。

糸がアメリカに向つたことから、日本糸は大きい影響を受けていることになる。

もちろん廣幅織物での生糸消費に未來がない以上、そこを主要にしている限り中國糸の前途は暗い。しかし既に展望は示されていた。その第一の根據は中國糸の品質特に類節缺點の向上である。日本本の占領後行なわれた中國糸の品質調査の總括で、次のように言っている。このように「類節缺點の

多い支那生糸は甚だ不利な状態にあるが、「然し乍ら本試験調査に於て支那原料繭を製糸したる成績、或は蠶種を飼育したる成績に於て類節缺點は可成り改良され、小類成績は三點乃至五點の向上を示して居る結果より觀て支那に於て將來飼育、上簇法が改善され、製糸技術が向上したる場合には、生糸の品質も向上し得る可能性あるものと認められる」。¹²⁹類節缺點は中國糸の宿命ではなかった。更に注意すべきは、この調査で採集された材料である。まず桑園は「事變以後に於て其荒廢が著しい」¹²⁹し、蠶種は改良種が激減して土種が増加し、その結果微粒子病毒率も高まっている。¹³⁰合作社は解體し、指導員も派遣されていない。¹³¹してみると、繭質の劣惡化は必然と言うべきであろう。更にこの試験には多條機が使われていないようである。¹³²即ちこの試験成績は、占領前の技術水準を示すものではなく、それを破壊した結果であり、「向上しうる可能性」は「將來」ではなく、過去にあったのである。「事變前に於ては之等の設備（多條機——奥村）に依り相當高級なる生糸を目的とした繰糸も行われていた」¹³³し、「繰糸法に於ける進展の方向について見られるところは……細糸化への途」¹³⁴、日本糸と競合する道であった。¹³⁵更に中國糸にとって有利であったのは「靴下製造業の發達につれて二一中下格品ですら尙ほ靴下に使用されるに至つた」¹³⁶ことである。その結果、「日本糸と中國糸の一般的消費分野の差異にも拘らず近年益々その區別が消滅しつゝあること」¹³⁷となつた。こうして品質・用途の兩方で日中の差異がなくなっていけば、如何なることになるか。¹³⁷資本の有機的構成の低い製糸業では、勞賃の差は決定的な意味を持ち、資本主義の發展した日本の不利は明らかであつた。

おわりに

蘆溝橋事件勃發後、日本の全面的侵略が開始され、長江デルタ地帯もまた日本の軍靴に蹂躪された。その後、この地域の蠶糸業の詳細な調査が行なわれ、結果は「諸般の事情と關連した微妙な事項が多いので」¹³⁸「極秘扱」で、二二三〇頁の『中支那重要國防資源生糸調査報告』としてまとめられた。その一節に次のようにある。「中支製糸業が進みつゝあつた

傾向——蔣政權の保護政策による急激な發展、繰糸機の改良、多條機の使用、さては無錫の薛氏一派に見られるが如き資本の集中の傾向等々を見逃してはならない。何となればかゝる中支製糸業の進展傾向こそ、我國製糸業との接觸面を多くし、我國製糸業に脅威を與へるものであり、従つて又日支製糸業の統制的進展を前面に押し出さしめるものであるからである。¹³³では「統制」は如何になされるか。「若し今次事變に伴ひ支那蠶糸業の發達が促され之が爲に日本の蠶糸業が衰滅の方向へ轉落するやうなことがあるならばそれは由々敷問題であると謂はねばならぬ。何故ならばその結果は直接間接の重要國防資源を失ひ農民經濟を危殆に陥らしめ聖戰に参加した多數の農山漁村の子弟に及ぼす思想上の影響も亦尠くないからである」。¹⁴⁰

三八年四月、日本は資本金三百萬元の中支蠶糸組合を設立し、片倉・郡是・鐘紡三社で構成する日華蠶糸公司に業務を代行させた。そしてこれと中國側製糸家との「合辦」の形で惠民蠶糸公司（無錫）、華福蠶糸公司（蘇州）を設立した。更に八月、以上を改組して資本金一千萬圓の華中蠶糸股份有限公司を設立し、江・浙地域の蠶糸業を統括させたのである。こうして華中蠶糸によつて糸廠の「復興」がなされるが、それは一部の糸廠に止まり、製品も「輸出向としては日本生糸に對する影響少な」い白二一中物に統一されたのである。そのため最先進の多條機は使用を禁じられ、鏑づくにまかせられた。¹⁴¹

しかし華中蠶糸の「復興」糸廠の少なすぎることは、生糸不足・繭過剩に歸着し、必然的に統制外の小糸廠を簇出させることとなった。日本はこの所謂家庭製糸に對して、全面的に禁止することはできなかったが、釜數を二〇以下とし、二釜以上の連結動力あるものを禁止するなど、土糸と變らぬ技術水準に落とそうとしたのである。¹⁴²更に華中蠶糸の統制に入らぬものに、上海の租界内に設立された所謂租界糸廠がある。これに對しては「原料供給ノ統制ニ依リテ漸時我方ト提携セシムルコト」¹⁴³としたが、要するに「上海方面ニ移行セントスル繭ヲ未然ニ防止セシ」¹⁴⁴め、潰そうとするものであった。¹⁴⁵

以上のことから、次のように結論できよう。蠶糸に関する限り、恐慌を契機とした國民政府の經濟建設は、早熟的な

「獨占」を形成し、中小業者や直接生産者に矛盾を轉嫁する形で成功しつつあったが、それは新たな國內矛盾とともに、日本との矛盾を深めざるを得なかった。

註

- (1) 「抗日戰爭前中國工業の研究をめぐって」『東洋史研究』第三五卷第二號、一九七六。なお拙稿執筆時には見ることができなかったが、A・B・メリクセツフ『中國における官僚資本』（中寫太一譯、アジア經濟研究所所内資料、一九七五）は、陳伯達の見解に對する有力な批判である。但し政策論が中心であり、その客觀的前提の分析の部分が相對的に弱いために、世界恐慌という世界的契機が軽く扱われている反面、孫文にまでいたる傳統的イデオロギーが過大に評價されているのではないかという疑問を感じる。
- (2) これまでの一九三〇年代の國民政府論の多くは、四大家族・官僚資本との對立が基本矛盾となった時期に書かれた陳伯達『中國四大家族』等に無批判的に依據し、民衆に對する惡どい收奪のみを強調してきた。しかし古厩忠夫氏が指摘しているように（「蔣介石政權の評価をめぐって」藤原彰・野澤豐編『日本ファシズムと東アジア』一九七七）、それだけでは民衆から「反蔣抗日」のスローガンはでも、「連蔣抗日」「逼蔣抗日」はでてこない筈である。收奪一般ではなく、恐慌の混亂の中から如何に經濟を再編し（それは收奪機構の再編でもある）、如何なる矛盾を内在させたかの究明が重要であらう。
- (3) 中國蠶糸業に關する戦後の研究は、島一郎「世界恐慌と中國製糸工業」（『經濟學論叢』第二一卷第五・六號、一九七三）と清川雪彦「戦前中國の蠶糸業に關する若干の考察（i）」（『經濟研究』第二六卷第三號、一九七五）がある。島氏の研究は本稿と時期的にも重なり、本稿全體がその批判とならう。清川氏の研究は一九三二年頃までを対象としたものであり、二〇年代を扱う豫定の別稿で批判したい。本稿の範圍内で兩者の問題點を指摘すれば、一、南京政府の蠶糸業政策の視角がないこと、二、その結果上海・廣東の兩地域を區別していないこと、三、上海地域を實質的に上海の糸廠で代表させていること、があげられる。
- (4) 恐慌により中國製糸業が受けた打撃の詳細は、島氏の前掲論文參照。
- (5) 井上晴九・宇佐美誠次郎『危機における日本資本主義の構造』一九五一、隅谷三喜男編『昭和恐慌』一九七四、など。
- (6) 被害糸廠は三一、營業を續けたのはジャーディン・マセソン系の怡和の二廠だけという（過去一年來糸業的衰敗及其救済『工商半月刊』第五卷第一號、一九三三）。
- (7) 「江浙糸廠同業公會宣言」（『工商半月刊』第四卷第一〇號、一九三三）。
- (8) この問題については、伊豫谷登士翁「一九三〇年代アメリカ

銀政策の展開」(『經濟論叢』第二二卷第一・二號、一九七八) 参照。

(9) 東亞研究所(藤本實也氏執筆)『支那蠶糸業研究』一九四三、四〇七頁。

(10) 『無錫糸廠先後復業』(『工商半月刊』第四卷第一九號、一九三三)。

(11) 一九三四年二月『時事新報』。但し錢天達『中國蠶糸問題』一九三六、四二頁より。住宅に建てかえられたのは三〇餘廠に達したという(東京商工會議所『支那の經濟恐慌に關する調査』第三卷商工業、一九三五、五二頁)。

(12) 民國二十四年『申報年鑑』五五一頁。

(13) 『申報』民國二十六年七月九日の「浙江省財政廳・緯成利記絹糸股份有限公司通告」。

(14) 以下の國民政府の政策は、主要には(1)國民黨中央黨部國民經濟計劃委員會編『十年來之中國經濟建設』一九三七、上篇第五章第五節、蠶糸改良(以上を『十年』と略す)、(2)木暮楨太『饒近の支那蠶糸業』(一)(二)(『蠶糸學報』第一八卷第一・一二號、第一九卷第一號、一九三六・七。それぞれ木暮(一)(二)と略す)、によった。また興亞院華中連絡部『中支那重要國防資源生糸調査報告』一九四一(以下『報告』と略す)、第三編第五『支那蠶糸業關係法規及對策決定事項調査』に、主要な法規が翻譯されている。

(15) 田中忠夫『支那製糸業の危機とその統制』(『東亞經濟研究』第一六卷第三號、一九三三)は、この時期の政策のブルジョア的性格を分析し、前途は悲觀的であると豫測したものである。

(16) 本稿で言う蠶糸改良は、技術改良と統制の兩方を含んでいる。なお三二―三三年には國際連盟からベンチノ・マリイが派遣されて技術指導に當っている。

(17) 恐慌期には大量の労働者が解雇されたが、糸況回復後も極端にまで押下げられた労働條件は改善されなかった。そのため三六年七月、上海・無錫の五九廠、五萬人がストライキにたちあがった。(『滬錫糸廠女工的罷工』『中國農村』第二卷第八期、一九三六)。

(18) 本稿では十分には觸れないが、糸繭金融にも新しい方法がとられている。例えば繭買付けでは、舊來の錢莊・銀行の糸廠・繭商への個別貸付けとともに、三六年頃から合作貸付けを行なっている。三六年春の例で見ると、中國・交通・中國農民等二一銀行と福源莊が銀團を組織し、一單位五萬元として参加各行の引受け單位を決定し、貸付準備總額三千萬元、月利〇・八五%、三ヶ月期限で糸廠を中心に貸付けることとしたが、實際の貸付け總額は六〇二萬元であり、單位數に應じて比例配分された(『江浙春繭放款銀團成立』『銀行週報』第二〇卷第一八期、一九三六。及び『十年』一二頁)。また後に見る浙蠶委の蠶糸改良の資金は、多く中國・交通兩行からの貸付けによるものである。蠶糸業の改良が、銀行に安定した投資先を保證していることを見ることができ、他方、廣東地方では廣東銀行が停業に追い込まれたことが蠶糸改良失敗の財政面での重要な原因であるとすれば、當該時期の銀行資本の役割は、輕視しえないであらう。

(19) 幣制改革は銀行資本におけるその歸結である。アメリカの對

中國政策との關連でこの問題を論じたものに、伊豫谷登士翁「世界恐慌下に於ける中國幣制改革」(『經濟論叢』第一二〇卷第三・四號、一九七七)がある。

(20) 所謂近代的獨占は、多額の固定資本投下を必要とする部門(主に重化學工業)に形成されやすく、製糸業の如き有機的構成の低い部門は參入が容易であることにより、一般には成立しにくい(ただし、この頃普及した多條繰糸機は多額の設備資金を要するため、日本でも集中は進んでいる)。他方、後進國において主として世界市場向けの商品を生産する企業が、資本・技術で遙かに優る外國企業と競争するため、原料生産から販賣までの全工程を把握し改良する必要が生じた場合、恐慌等を契機として、國家權力との密接な關係によって「獨占」を形成することはありうる。この時期の中國蠶糸業においてみられる「獨占」についても、それを「前期的」と把握することは、世界市場における競争を無視する點で一面的であるし、また當時の中國資本主義の發展段階からして、一概に近代的獨占と同一視することもできない。本稿で獨占到「」を付けたのはそのためである。

(21) 本稿で觸れなかったものとしては、註(19)の合作貸付けの他、桑苗の無償配布、生糸品質の第三者格付けの強制、等がある。
(22) 例えば「江蘇省ノ蠶種改良ハ蘇州ノ女子蠶業學校民間製糸家等ガ中心ニテ政府ハ追從」(外務省通商局『江浙蠶業ノ現狀』一九三〇、一頁)等。

(23) 名稱からしても、蘇蠶委は「蠶業改進管理」であり、浙蠶委の「蠶糸統制」と職掌も方法も異なるニュアンスである。

(24) 以上は小野忍「無錫の製糸業」(『滿鐵調査月報』第二一卷第一〇號、一九四一)。

(25) 苦農「糸繭統制下の無錫蠶桑業」(『中國農村』第二卷第九期、一九三六)。

(26) 「報告」二〇七六頁以下に三六・七年の「蠶種統制辦法」と、三五年の「蠶種製造取締補充辦法」が譯されている。蠶種價格と農民の支拂う代金は蘇蠶委が決定し、後者を下げて差額を蘇蠶委が補給する形で、改良種を普及した。

(27) 實業部國際貿易局編「中國實業誌江蘇省」一九三三、第五編第八章蠶桑。農家自製が八〇%、製造業者による土種一五%である。

(28) 木暮(一)、三六頁。

(29) 註(28)に同じ。

(30) (苦?) 農「糸商活躍中的中國蠶農」(『中國農村』第二卷第三期、一九三六)。

(31) 木暮(一)、三八頁。但し浙江等に百萬枚以上移出したらしく、江寧では日本から粗惡蠶種を輸入して被害を受けている(孔凡定「江寧蠶糸產銷合作社的實況」『中國農村』第三卷第八期、一九三七)。

(32) 朱振之「蠶糸改良統制下の江浙蠶農」(『中國農村』第二卷第七期、一九三六)。

(33) 註(32)の書によれば(六頁)、二九年頃は春蠶八〇%、夏蠶一五%、秋蠶五%位であったという。しかし改良種の冷蔵人工孵化がほぼ百%成功するようになった三〇年代には秋蠶が勃興し、ほぼ春蠶に匹敵する位の普及をみたが、夏蠶は農繁期とぶ

つかるため、逆に衰微した。また晩秋蠶も三五年頃から現れ始めた（木暮(一)、三二頁）。

(34) 木暮(一)、二六頁の受指導蠶種枚数と、同三二頁の掃立數量から計算。秋蠶では前年に比べ十倍の増加という（同二七頁）。

(35) 中國合衆蠶桑改良會の調査によれば、三二年春蠶が三〇・二元、以下次第に減少し、三四年秋蠶には一四・三元となつてゐる。これは一貫目九五錢に相當するが、同年日本では一貫目一圓以下の所はないという（木暮(一)、三五頁）。

(36) 以下の合作社の記述は、苦農「養蠶合作運動在無錫」（『中國農村』第三卷第六期、一九三七）による。苦農の記述に疑問がない譯ではないが（例えば註24小野論文、木暮(一)一七頁、参照）、他に依るべき史料を見出せなかつた。

(37) 註21の孔論文によれば、江寧では縣内の養蠶農家は強制的に合作社に加入させられた。この江寧蠶糸産銷合作社は、薛家の支配下にはないようであるが、一切の決定權は本社理事と高級職員に握られており、一般社員にとっては、やはり效率的に搾取される場であつたという事情は變らない。

(38) 合作社、殊に特約取引のそれが繭の流通費用を減じる（流通過程の合理化＝資本による掌握）ことも重要である。東亞研究所（堀江英一氏執筆）『經濟に關する支那慣行調査報告書——支那蠶糸業における取引慣行——』一九四四、七四頁以下を參照。

(39) 木暮(一)、一七頁。繭行が委託されて購繭する場合もある。繭の八、九割がここで取引された。

(40) 單灶四臺以下の設備の繭行は免許取消し、等（同前）。

(41) 『十年』、七頁。
註22に同じ。

(42) 『十年』三頁。

(43) 春秋三八八行、秋期三六五行（木暮(一)、二二頁）。

(44) 註23に同じ。四二頁。同一二頁。

(45) 註24苦農論文によれば、三五年には宜興・溧陽等の縣では全繭行が薛家の請負いであり、無錫は全面請負いではなかつたが、完全に實權を握つていたという。また時期は不明であるが（おそらく次にみる興業公司設立後）、江浙兩省に四〇〇以上の繭行を開き、安徽毫縣、山東周村、湖南岳陽にも勢力を持つていたという（『舊中國的資本主義生産關係』同書編寫組、一九七七、二九四頁以下）。

(46) 註22に同じ。註25論文にも同様な記述がある。

(47) 常宗會「中國蠶糸業復興之路及蠶糸業と國民經濟の關係」（『中國蠶糸』第一卷第一〇號、一九三六。但し『報告』一六八頁以下による）。

(48) 養蠶農民の最低限の再生産を通して、地主への地代を保證するという意味も持つ。

(49) 以上は「錫邑會商整理糸廠問題」（『工商半月刊』第四卷第一〇期、一九三二）。

(50) 註24に同じ。

(51) 『報告』第二編第四の一、無錫製糸業調査、は、興亞院政務部『無錫工業實態調査報告書』一九四〇、の第二章製糸業と同文である。『報告』八〇七頁には、多條機は四糸廠八七〇金とあるが、これには未調査の瑞綸二八八金が含まれていない。瑞

綸が多條機であることは、例えば『江蘇建設月刊』第三卷第三期、一九三六、の統計一頁参照。糸廠數、金數、營業糸廠數は『報告』八〇三—四頁参照。但し營業糸廠は、瑞綸を含む未調査八廠を營業していたと假定している。

53 後に見るように、蠶改委の援助はあったが、浙江ほど手厚いものではない。

54 無錫各機關各國體編『第一回無錫年鑑』一九三〇、工業一三頁、によれば、泰豐・民豐兩廠が日本式、振藝誠記・永泰兩廠が日・伊の兩方、その他はイタリ式である。日本式とイタリ式の違いは、主要には乾燥裝置の違いと、煮繭・添緒の工程が日式が兼業、伊式が分業となっている點であるが、中國側文獻での區別は殆んど前者によっているようである。

55 『報告』八〇八、九四三頁。

56 『十年』六頁。

57 註38に同じ。一一二頁。

58 糸廠名は程炳若以外は、『江蘇建設月刊』第三卷第三期の統計一頁(三五年の調査)による。程は前掲『無錫工業實地調査報告書』八三二頁(三四年の調査)による。

59 以下使用する史料以外には、註29,32等。

60 註30に同じ。租廠制が「獨占」を容易にしていることがわかる。

61 朱楚辛「中國的糸繭業」(『申報週刊』第一卷第二二期、一九三六)。

62 同年六月七日の『申報』。

63 但し陳眞編『中國近代工業史資料』第四輯上卷(一九六一)

一七五頁以下に所收された一九四一年六月二七日の『中華日報』によれば、興業公司是組織することが検討された段階で、一部同業者の反對と内部分裂で實現しなかったという。しかし筆者の知る興業公司に關する抗日戰前最後の記事である金聲「乾繭之出口觀」(三七年一月二八日付『申報』)には、「無錫糸業の巨頭薛壽宣氏の經營する各廠及び新しく創設した興業公司もまた續々多條式及び再繰式の糸車に改めた」とあり、組織の検討段階で潰れたというのは明白に誤りである。『中華日報』の記事は日本の侵略期に書かれたものであるが、この點で興味深い事實を示しておこう。『報告』は薛家が所有又は經營に關係していた糸廠として、永泰・華新・永盛・裕生・振藝・振元・鼎昌・鼎盛・福倫・永裕・森明・宏餘・泰孚・禾豐・嘉泰・潤康・大生他一廠、計一八廠をあげている(八一〇頁)。しかしこれは(1)堀江氏の擧げた糸廠名と一致しない、(2)日本の侵略によつてほぼ全壊した糸廠(一五廠)が一つも含まれていないのは確率的に考えられない。(3)逆に全壊糸廠の中には明白な薛家經營糸廠(錦記・民豐等)があるが無視されている。(4)全壊を免れた糸廠で擧げられたもの以外にも、薛家關係の糸廠が存在する(隆昌・永潤等。『報告』九四三頁以下参照)等の點で不可解である。ではこの一八廠は何を示すのか。日本による無錫占領後、日本側の中支蠶糸組合、中國側の興華公司の共同出資という形で惠民製糸公司が設立され、これが後に華中蠶糸株式會社に吸収される。ここで注目すべきは、この時興華公司が「現物出資」した一五糸廠中、五豐(乾姓第二)・宏緒を除く一三廠が、先に擧げた一八廠の振藝以下に一致すること

ある『報告』八三八頁)。五豊・宏緒も「夫れ夫れ鼎盛・宏餘糸廠が擴張したもの」(『報告』八四二頁)とするなら、この一八廠は明白な薛家所有の永泰・華新・永盛三廠と裕生、プラス興華公司の糸廠、他一廠となる譯である。そして『報告』八四一頁は、興華公司とすべき所を興業公司としているのである(註9)五〇六頁も同様であり、單なる誤植とは思えない。ちなみに管見の限り、日本の文獻で興業公司なる語が出てくるのは、この二例のみである)。こうした事實から、筆者は次のように推測する。興業公司是抗日戦まで存続した。日本は無錫占領後、興業公司傘下の糸廠で全壊を免れたものを接收しようとしたが、薛壽萱がアメリカに亡命(註9に同じ)したため、そのままの形で「合法的」に接收できず、興華公司なる企業をデッチあげて興業公司の糸廠を「現物出資」させるとともに、興業公司の存在を抹殺した、と。次に見る浙江の蠶糸改良で、中心的な役割を果たした省營の杭州糸廠は、占領後略奪された上に均されて平地と化した(『上海外貿史話』同編寫組編、一九七六、一二三頁)結果、『報告』九八二頁では抗日戦前それが存在した事實も抹殺されていることからすれば、「極秘扱」の『報告』にも記されぬ「極秘」があることは明らかであり、このような推測は可能であると思われる。

64 生糸年度の二九年度には、緯成・虎林兩廠で上海港輸出廠糸の一五・七%を占めている(興亞院華中連絡部『中支ニ於ケル生糸流通ニ關スル調査』一九三九)。

65 本稿では詳述する餘裕はなく、差當り蠶糸業同業組合中央會(上原重美氏執筆)『支那蠶糸業大觀』一九二九、四三八頁以

下を参照。「製糸家が斯る不利なる條件で先賣りをして居る間は到底有終の功果を収めることが困難ではあるまいか」(同書四四三頁)。

66 木暮(三)、三四頁は、江蘇省が通運貿易公司を直營し、ニューヨークとリヨンに出張所を設けて、生糸の宣傳販賣と海外情報報告をさせていると記している。該公司は確かに存在したが、生糸貿易改善の必要を論じた他史料(例えば李善初「華糸販路擴張獨議」『中國蠶糸』第二卷第一一號、一九三七。但し『報告』一六七四頁以下。或いは『十年』八頁以下等)に見えず、省の直營というのは誤りと思われる。

67 『十年』八頁以下。

68 註64に同じ。三六年度は一三四八一俵。

69 前掲『中國近代工業史資料』第三輯下卷、一〇九二頁。

70 佐伯有一・田中正俊「一六・七世紀の中國農村製糸・絹織業」(『世界史講座』1、東洋經濟新報社、一九五五)江蘇も蘇州付近は浙江に類似した状況である。

71 前掲『支那蠶糸業大觀』一七三頁以下。

72 註62に同じ。一九頁。

73 『支那蠶糸業大觀』三五九頁。

74 沈九如「浙江省新種業之過去現在及將來」(『中國蠶糸』第二卷第八、九號、一九三七。但し『報告』一六二二頁以下)、三五年春の病率率は六・二%である。

75 沈九如「十年來之浙江蠶糸業」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第一期、一九三七)同論文には三六年度の被指導戶數・枚數もあげているが、調査不備であるため、採用しなかった。

- 60 例えば三四年春期の「浙江省統制繭行暫行辦法」(『報告』二
一八頁以下)。
61 註9に同じ。
62 同期の「浙江省管理收繭暫行辦法」(『報告』二二二頁以
下)。
63 『十年』一四頁。木暮(三)によれば、同様の理由で三二年秋に
も、生繭約五千擔を購入したという(一九頁)。
64 三五年の蠶桑改良は、浙江省建設廳蠶糸統制委員會編『浙江
省建設廳二四年改良蠶桑事業彙報』一九三六(以下『彙報』と
略)に詳しい。
65 『彙報』章則三頁。
66 『彙報』「春期統制管理收繭經過概況」の表より計算。
67 同「秋期統制管理收繭經過概況」より。
68 木暮(三)一九頁以下。
69 同年六月二日付『申報』。
70 木暮(三)二〇頁。
71 『報告』二二四一頁。
72 『籌議創組糸業托辣斯』(『銀行週報』第一七卷第七期、一九
三三)、思棟「談糸業托辣司」(『錢業月報』第二三卷第三期、
一九三三)等。
73 『全國經濟委員會會議紀要』第四集(『編譯彙報』第八編、
一九四〇)三七頁。
74 『江浙連合糸廠協商進行』(『工商半月刊』第六卷第二〇號、
一九三四)。
75 『經委會蠶糸改良會積極籌組江浙連合糸廠』(『工商半月刊』

第七卷第四號、一九三五。

- 76 同上。木暮(三)二七頁は、「江蘇省に三百臺」とあるが誤りと
思われる。
77 『改良蠶中之全國蠶糸近況』(『國際貿易導報』第七卷第九
號、一九三五)。「十年」三頁は緯成も擧げてゐるが、誤りで
ある。
78 以上は註9及び『十年』三頁。「十年」では貸與先の糸廠名
にいずれも「等」がついているが、數量からして擧げた糸廠に
限定されると思う。また註9では、杭州糸廠に貸與した額を一
萬五千元としているが、二萬五千元でなければ計算があわない
(蔣師岡「蠶糸衰落中之杭州緯糸廠」『浙江省建設月刊』第九
卷第三期、一九三五、による)。
79 『彙報』章則九頁。
80 『十年』三頁。
81 同書一八頁。
82 『彙報』會議紀錄四頁。但し實際の代緯糸廠は、開源・緯成
鶴記・振藝が抜け、緯成・女蠶が加わった七糸廠である(同八
頁)。
83 沈九如「八年來浙江省救濟蠶糸事業之概述」(『浙江省建設月
刊』第九卷第三期、一九三五)。
84 註9、四頁。
85 この八糸廠の他、緯成・女蠶も加わっていると思われる。
86 註9に同じ。
87 曾養甫「中國蠶糸統制政策の切要と浙江蠶糸統制の成績」
(『中國蠶糸』第二卷第四號、一九三六。但し『報告』一六九

四頁。

004 「浙江省建設廳統制下の一五家の連合糸廠にいたっては、今年のもうけは極めて大きい。該廠等の今年の原料は全て統制會の供給したものであり、繰糸機もまた最新式だから製品も均一で、販賣方面でも」浙蠶委が科學的にやって「いるからである」(『浙統制蠶糸反響』「農學月刊」第一卷第三期、一九三五)。實際は「全て」ではない。

005 「浙蠶糸統制會決議設江浙連合糸廠」(『農學月刊』第二卷第四期、一九三六)。

006 註003に同じ。『經濟研究』第一卷第九期、一九四〇、一六七頁も参照。

007 三〇年は李安「調査浙江蠶糸業以後」(『國際貿易導報』第一卷第五號、一九三〇)による。三七年は沈九如「十年來之浙江蠶糸業」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第一期、一九三七)による。

008 『經濟研究』第一卷第九期。一四三頁。

009 註005に同じ。

010 三六年六月二〇日付『申報』。大部分は前年と前しく、洋行を通して輸出したという。又「十年」八頁によれば、代繰の生糸だけでなく、各廠の生糸も代つて直接輸出したという。ともかくこの年は試験の意味が強かったと思われる。

011 註04に同じ。

012 木暮(三三四頁以下)。

013 浙蠶委主席の曾養甫が、蠶改委の主席を兼ねている。

014 三六年二月、浙蠶委は建設廳を離れて省政府直屬となった

(註00沈九如論文)。

015 許濂新「官僚資本論」一九四九、六五頁。

016 註004参照。又、全經委の蠶改委「が各廠を連合して組織した連合糸廠は、新式の地球印糸車五百釜を購入・設置した後、生糸を出品したが、それに對して外商は極めて満足し、輝かしい成果をあげることとなった」(一九三六年二月六日付『申報』)。

017 註00李善初論文。

018 註03金聲論文。

019 一九三五年一〇月二〇日付『時事新報』(但し註00より)。

020 以上は註004に同じ。

021 註008に同じ。一五四頁。

022 一九三七年五月二二日付『新聞報』。

023 木暮(二八頁)。

024 「十年」八頁。

025 「無錫糸市活躍」(『農學月刊』第一卷第三期、一九三五)。

026 「十年」一〇頁、等。

026 第二表参照。生糸年度では抗日戰前最後の年となる三六年度は、前年度より微増でアメリカ向けが増えている。

027 恐慌前の比較としては、二九乃至三〇年を用いるべきである(南京政府成立後、無錫・浙江で糸廠が急増している)が、手頃な史料を見出せなかった。

028 「報告」七七二頁。

029 同上、一五二頁。

030 同上、一五四頁。

031 同上、一五七頁。

- 032 同上、六七七頁以下のサンプル明細表。
 033 同上、六五四頁。
 034 同上、九八九頁。
 035 東亞研究所（秦玄龍氏執筆）『支那生糸の世界的地位』一九四二、一七頁。
 036 同上。
 037 「日本生糸の高價なることは、米國業者をして支那糸に漸次目を向けしめる原因となった」（同上）。
 038 『報告』例言。
 039 『報告』八九頁。
 040 同上、六頁。
 041 同上、一六〇頁以下。
 042 同上、二三〇七頁、「實業部管理手工製糸業暫行辦法」。
 043 同上、二一九四頁、「中支那工業指導要綱」。
 044 同上、二一八七頁、「蠶糸事業統制ニ關スル指導要領ノ件」。
 045 華中蠶糸公司についての戦後の研究は、註(5)井上、宇佐美兩氏の業績の他は、小林英夫『大東亞共榮圈』の形成と崩壊』一九七五、二二三—七頁、を知るのみである。

〔追記〕

本稿と關連の深い經濟建設に關して、石島紀之「南京政權の經濟建設についての一試論」（『茨城大學人文學部紀要（文學科論集）』第一一號、一九七八）が發表されたが、本稿脱稿後であり、生かすことができなかった。筆者も國家資本主義論に大きな魅力を感じているが、帝國主義の動向や「官僚資本主義への轉化」の問題等、なお理論的な深化が必要であるように思われる。

A Re-organization of Sericulture in Kiang-Che under the World Crisis

Okumura Satoshi

Previous studies of the Chinese economy during the 1930s have emphasized the weakness resulting from Japanese aggression and the threat of war, and the entrapment of the people in the "bureaucratic capitalism" of Chiang Kai-shek. Thus the feudal aspects and the acquiescence in imperialism of the Kuomintang government are stressed, and the entire process is viewed as the nipping in the bud of Chinese capitalism and the suppression of "nationalistic capitalism." In this essay, I shall criticize this view with reference to sericulture in the Kiangsu and Chekiang areas.

The improvement of sericulture, which was one part of the Kuomintang policy of economic reconstruction aimed at raising the technical level of the silk industry, then in decline under the threat of war, with a view to competing with Japanese silk, then completely dominant on the world market. As a result, the private Family of Hsüeh 薛 in Wu-hsi 無錫 became dominant in Kiangsu, while the provincially-run industries formed the basis of production in Chekiang. These monopolies improved the quality of the silk, organized the peasants in production co-operatives, and using the power of government control produced raw silk of superior quality and low price.

By using new machinery the quality of the finished silk was further improved, and the cost lowered. Inroads were made on the raw silk market, dominated by foreign companies. In this way the mechanized silk industry of the area was not only able to overtake Shanghai, which had been the centre of the industry in the 1920s, but proved competitive with Japanese silk on the American market.